

夫は私達家族の中に共に生きている

松 岡 和 子

私は、夫と出会って、人として生きていくとき「何を考え、何を求めて」生きていくべきかを学び、影響を受けてきたように思います。このように語ったら、余りに漠然としていると思いますが、あの人が、1988年3月20日に新評論より出版された、ローザ・ルクセンブルク方法・資本主義・戦争―の本を通して語りかけてくれているのです。其の気持ちを抱きながら、出来るだけ、人が人として生の尊厳を敬い、そして周りの全てに感謝し、平和に過ごすため、社会のあり方を求めながら意識して生きています。

長年保育士としての、職についていますが、上記の観点から、この世に「オギャー」と誕生したときから、人として受容をされ、そして生きていくための喜びを、乳幼児期から、しっかり受ける事が大事であると思います。周りの大人が、自分たちの未来を託す子どもに、いかに生きて欲しいのかを想定して、大切に伝えていく必要があると考えています。其の大切さとは、自己利益を考えた生き方ではなく、人類が平和であるための生き方に即した価値観であるべきだと私は思います。夫は、家庭内において、子ども達には、そうした気持ちを持って対応していたように思います。そうしたことを基盤におきながら、いろんなことを語り合う時間がとても多く持っていた家族であり、家庭だったと私は思っています。

夫が思いもかけない「癌」と言う病名を宣告されたときに、「うそ、何かの間違いなのでは。だって職場の健診でなんらそうした兆候がなかったのでは？」と感情のものがきがありました。「4ヶ月、よくもって6ヶ月」と宣告されたとき、信じられず、間違いであって欲しいと思いました。夫と家族で、それから、さまざまなデーターや、知り合いの方の考え、そして本から、自然治癒力をいかした、自然療法の道を選び、家族との、二位三脚で癌と戦いました。1年が過ぎた頃、進行も見られず、夫もとても元気だったので、癌に勝ったと思ったのですが悲しい結果を私たちは、受け入れなければならない事になってしまったのです。

ただ、最後の最後まで、本人の意識がはっきりしていて、苦しむことなく、死を迎えるときの人間のありようを、私たち家族に示してくれたように思っています。一足先に行くが、それは悲しいことではなく、自分の中に受け入れられていることを話、再び会えることを楽しみにしている事と、いつでもそばにいることを伝えてくれました。それが残された、私たち家族の、生きる力となって、夫とともに歩んでいます。

毎朝、「南無阿弥陀仏」と両手を合わせた時に、いつも夫と会える喜びを感じ、1日の始まりに感謝日々を過ごしております。

夫の生前から、今日に至るまで、さまざまな方々のお世話になり誠に有り難うございました。

この場をお借りして深く心から感謝申し上げます。皆様方のご多幸とご繁栄を心からお祈り申し上げます。